

## E. S. P. としての英文アブストラクト作成と プレゼンテーション演習の導入\*

森下浩二\*\*

### Introduction of Abstract Writing and Presentation Tasks into Classes as E.S.P.

Koji MORISHITA

#### Abstract

In ESL/EF teaching, English for Specific Purposes has been attracted attention as one of potentially useful techniques. This is because it can provide learners with various activities considering the close relationship between language and the situation in which it is used so that learners can achieve each of their future communicative goals. In this paper, writing abstract of scientific research is chosen as one of such activities. Though students realize the necessity of writing abstract of their research in English after leaving school, they have not been provided such training courses at school. For such students, a format consisting of 6 topics is presented as a guiding light when they write an abstract of each of their own researches in English. It is expected that once students get the information of constructing an abstract, they can arrange the structure to fit their own future needs. Students also engage in presentation activities based on their abstract. At the end of one semester, a questionnaire is carried out. Presenting the activities and the results of the questionnaire, the potential of this trial will be discussed.

#### 1. はじめに

学習者が将来学習言語を用いる場面を想定し、その状況で求められるコミュニケーション遂行能力を育成する“English for Specific Purposes (E.S.P.)”は、学習者がその必要性を強く意識することで、課題解決に対して動機づけを強め、学習効率を上げる点で注目を集めている。E.S.P.の指導において中心的項目となるのは“genre”である。“genre”は何らかの遂行目的を持つ“action”によって定義される (Miller 1984) が、学習者は必要な“genre”におけるコミュニケーション運用能力育成に積極的に参加することで、将来その時々の使用目的に対して効果的な言語活動のレパートリーを蓄積することが可能となる。

佐世保工業高等専門学校では、専攻科生は「特別研究」に取り組み、本校修了時、その報告書を作成することになっており、その際アブストラクトに関しては英文で作成することが求められている。今回、その必

要性を勘案し、専攻科2年生「総合英語Ⅱ」において、英文を用いたアブストラクト作成活動に取り組むことにした。目の前に確かな目標として自覚できる必要性が学習に取り組む強い動機づけを生み、それが授業への積極的な参加となって表れ、最終的に学習効果をあげることが期待された。

#### 2. 平成24年「英語教員を対象とした科学技術英語研修会」

英文アブストラクト作成を担当する専攻科の授業に導入する取組を計画するきっかけになったのは、熊本高等専門学校熊本キャンパスにおいて平成24年3月実施された、「英語教員を対象とした科学技術英語研修会」であった。この研集会は、英文アブストラクト作成を中心として、英語を用いた論文作成・作成指導に興味を持つ教員を対象として計画され、認知言語学を専門とする J.フォスター氏を講師として開催された。本研修会は、英文の科学系論文におけるアブストラクトの役割・具体的な構成についての紹介に加え、実際に英文アブストラクトを

\* 原稿受付 平成28年10月19日

\*\* 佐世保工業高等専門学校 一般科目

作成する演習も組み込まれており、講義と実践のバランスに配慮された3日間の活動内容であった。

一連の英文をつなぎ段落を構成するパラグラフライティングについては、近年その必要性の認識は広がり、ライティングの授業で用いられる多くの教科書で紹介されている。その際のキーワードは「トピックセンテンス」と「サポーターセンテンス」になる。そしてその段落の展開については、「時系列」「原因と理由」「比較・対照」等複数のパターンが取り上げられている。ただし、同じパラグラフライティングでも、論文におけるアブストラクトに関してはまた独自の構造を学習する必要がある。それは、アブストラクトは、一文一文が論文全体の内容を想像させる役割を持つからである。言い換えると、それぞれの文がトピックセンテンスの役割を果たす(一つ一つの文が等しい重要性を持つ)ことになる。

認知言語学を専門にするフォスター氏の説明では、アブストラクトの役割は、短時間でその論文の存在意義を相手が理解できることを可能にするものであり、書き手と読み手がフォーマットについて共通理解を持っていることはその実現性を高める、という説明であった。その共通理解が多ければ多いほど、書き手は読み手に負担をかけないことになり、ひいては書き手が伝えたい内容がよりよく読み手に伝わる可能性が高くなり、同時に論文のインパクトが強くなる、という点を強調された。ここに、アブストラクト構成の特徴を学ぶ必要性を見出すことができる。

フォスター氏が科学・工業関係の論文における英文アブストラクトを分析した中から抽出したエッセンスは6つあり、それは以下の通りである(Foster 2012)。

- ①どの分野における研究か。
- ②現時点においてどのような問題が存在するか。
- ③同分野の先行研究との関連はどのようにになっているか。
- ④その問題に対して、今回どのような解決方法を提案するか。
- ⑤問題解決の意義は何か。
- ⑥その論文において、何をどこまで取り扱うのか。

フォスター氏の説明を聞いた後、筆者自身それまでにかつての学生が作成した英文アブストラクトを添削した経験を思い返すと、その体裁は様々で、(文法、ボキャブラリーに関する間違いは除いても)特にその効率的な意

義を考慮していない、論文の単なる「あらすじ」になっているものが多かったことが思い起された。学生が作成する英文アブストラクトには、あまりにも詳細な内容を組込み、逆に論文の全体像がつかめない(その論文の独自性・価値があいまいになっている)ものがあった。もちろん、どの研究冊子に投稿するかで具体的なアブストラクトのフォーマットは決定されることになるが、本取り組みにおいては、まず、基本的な土台作りとしてフォスター氏が提案する6個の項目からなる英文アブストラクトをひとつの雛形として学生に提案することにした。その雛形について理解を深めた後、将来的には各学習者がそれぞれの必要に応じて(掲載される研究冊子の体裁に従い)アレンジを加えていくことが期待される。

### 3. 対象学生と授業内容

対象学生は、「総合英語 II」を受講する平成27年度本校専攻科生2年生22名である。

実際に英文アブストラクト作成を取り扱う授業を始める前段階として、学習者がその時点で理解しているアブストラクトの意義を尋ねた。すぐに返ってきたのは「要旨」「まとめ」というものであった。その中には、単に実験内容を時系列にならべたもの、また、本文と同じレベルでその結論についての詳細な説明を含めることが必要である、と答える回答があった。これはアブストラクトと論文全体の役割が混同していることから生じる問題と思われる。助長に、実験の手順を記載する説明文が続くのではなく、コンパクトに必要な情報を組み入れるためにも、雛形としての英文アブストラクトを学習者に提案することは意義があると思いを新たにしたい。

また、学生にアブストラクトに含める情報を問いかけた際、研究の目的やその意義についてはすぐに回答が出たが、フォレスター氏が提示した「先行研究との関連」についてはなかなかその回答がでなかった。この項目は、同分野における自分の研究の位置づけを明らかにするために必要な情報であり、研究論文に求められる「独自性」につながるものである。学習者にこの点を理解してもらうためにも、フォスター氏が提案する雛形を提供する意義を推測させる結果であった。

「総合英語 II」は前期2単位(100分授業×15回)であるが、その内容は「TOEIC 試験対策」と「英文アブストラクトの作成」の半々に分けて実施した。さらに、今回は「英文アブストラクト」を作成すること

に加え、それを土台とした英語を用いた「プレゼンテーション」を授業活動に組み入れることにした。これは、アブストラクトと、その論文全体との関係(アブストラクトは単なる論文の「要旨」ではなく、いかに効率的に論文の内容を伝えるかを考慮し、作成するものであるか)、を学習者に実感する機会を与えることを考えたからである。

プレゼンテーションの展開にもいろいろなフォーマットがあり、その目的に応じて使い分けことが期待されるが、その手始めとして学生が自信を持って取り組むことを可能にするため以下の構成を一つの雛形として示した。

『プレゼンテーションの概略⇒動機・バックグラウンド⇒実験方法・理論⇒結果と考察⇒まとめと将来計画』(廣岡、2014)。

英文アブストラクト作成に関する15回(1回につきおおよそ50分)の授業内容は以下の通りであった。

- 第1回授業 英文アブストラクトの役割・構成についての説明
- 第2回授業 英文アブストラクト6つの項目について説明・演習(1)
- 第3回授業 英文アブストラクト6つの項目について説明・演習(2)
- 第4回授業 英文アブストラクト6つの項目について説明・演習(3)
- 第5回授業 プレゼンテーションにおけるグラフの説明について
- 第6回授業 プレゼンテーションにおける質疑応答について
- 第7回中間試験
- 第8回～13回 プレゼンテーションの実施
- 第14回 総まとめ
- 第15回 期末試験

プレゼンテーションの実施については、アブストラクト作成の発展形と捉えると同時に、ヴィジュアル資料としてパワーポイントの作成、そしてその中に必ずグラフを加え説明することも義務付け、一人5分程度の持ち時間で実施した。その後、それぞれ2名の学生から質問を受け、回答する活動までを1セットとして

組み入れた。今回はあくまで演習(シミュレーション)という観点から、英語による質疑応答は事前に原稿を作成し、学生間で練習しておくように指示した。(アドリブによる英語を用いた質疑応答は、学生の英語力不足、また特別研究の特殊性から学生の負担として過重で、学生の積極的な取り組みを妨げるものとして危惧した。)一人の学習者のプレゼンテーションが終わった時点で、筆者による簡単な講評を行った。これらすべてを含み、一人のプレゼンテーション発表活動に割り振った時間は10分であった。

プレゼンテーションの実施について、後の振り返りを考慮し、まずプレゼンテーション準備段階において各自に準備の状態を確認するチェックシート(資料1:前半が「プレゼンテーション準備段階について」、後半が「プレゼンテーション実施後について」の記載内容となっている)を配布した。発表者以外の学生については、積極的にそのプレゼンテーション活動に参加することを可能にする目的で、7つの項目におけるプレゼンテーション評価シート(資料2)を配布し、単なる聴衆ではなく、プレゼンを評価するという姿勢を意識し観察することを求めた。これは、他の学生のプレゼンを見る・聴くだけでなく、評価法を共有することで、自らがプレゼンする際、何に意識してプレゼンテーションに取り組めばいいか考え、その準備に利用することを期待してのことであった。評価については、それぞれの項目について単に3段階で評価するものとした。これは、評価に慣れない学生に負担をかけることなく、より客観的にクラスメートのパフォーマンスを判断できることを考慮した結果である。

各自プレゼンテーションが終わると、締めくくりとして、振り返りシート(資料1)を提出するという一連の流れを経験することになる。

プレゼンテーションを行った学生に対する教員からのフィードバックは、プレゼンテーション直後の授業時間内での講評、そして他学生が作成した評価シート(資料2)とプレゼンテーションを行った学生が提出した振り返りシート(資料1)の内容を考慮したコメント・アドバイスの返却、という2段階で行った。

本校の専攻科は本科では4つの専門に分かれているが、専攻科ではそれらがまとまって一つのクラスが構成されている。そのため、他の学生の特別研究の内容には十分な予備知識を持たない学生もいる。その中

であって、他学生のプレゼンを評価する活動を設けたことで、単に英語によるプレゼンテーションを聞き流す事態も避けられたと思われる。

#### 4. アンケート内容

すべての学生のプレゼンが終了した際、今回の取り組みに関して、アンケートを実施した。そして、設問(6)(11)を除き、まず「はい」「いいえ」で回答し、必要に応じてコメントを記載するものである。そして(6)(11)は具体的に学習者の考えを記述するものである。

- (1) 今回、「総合英語Ⅱ」に参加する以前に、日本語を用いた論文アブストラクト作成について学習したことはありましたか。
- (2) 「総合英語Ⅱ」に参加する以前に、英語を用いた論文アブストラクト作成について学習したことはありましたか。
- (3) 高専修了時の「特別研究」でアブストラクトを英文で作成する以外に、今後(たとえば、企業・大学院で)英文アブストラクト作成に取り組む必要性を予測していますか。
- (4) アブストラクトにかかわらず、これまで英語を用いて専門分野の説明をしたことはありますか。
- (5) 今回フォスター氏の提示する英文アブストラクトの構成について、理解が難しい項目はありましたか。
- (6) 英文アブストラクトを作成するうえで、一番難しいと思った事はどのような点でしょうか。
- (7) 今回、英文アブストラクト作成について興味を持って取り組むことができましたか。
- (8) 今回学習した内容は、今後英文アブストラクトを作成する機会があった際、役に立つと思いますか。
- (9) クラスメートのプレゼンを評価する活動について、適切に評価できたと思いますか。
- (10) クラスメートのプレゼンを聞くこと・評価することは、何かしら自分のプレゼンへのヒントを与えてくれましたか。
- (11) 英文アブストラクト・英語によるプレゼンテーション活動について、今後授業内容を改善すべき点について、あなたの考えを記載してください。

#### 5. アンケート結果

次にアンケート結果を示す。番号はアンケート設問番号を表している。なお、今回22名の学生が受講したが、最後の授業に参加した20名にアンケートを実施した。

##### (1) はい 8名、 いいえ 12名

アブストラクト作成について、日本語での作成について学習した経験がある学生は8名であった。その内容は、授業の一部での説明を聞いた、卒業研究での論文作成時に担当教員より指導を受けた、ということであった。その一方で、12名の学生は学習したことがないと回答しており、半数以上の学生は少なくともこれまで特に意識して系統化された指導は受けていないことがわかった。

##### (2) はい 5名、 いいえ 15名

英語を用いたアブストラクト作成については、5名の学生は経験があると回答した。その反面、学習した経験がないと回答した学生が15名いた。これらのことから、クラスの多くの学生が英語による論文アブストラクト作成に焦点をあてた授業を受けていないことが確認できた。

##### (3) はい 17名、 いいえ 3名

本校専攻科を修了した際、企業への就職・大学院への進学と進路は分かれることになるが、今後、英文アブストラクト作成の必要性を予測している学生は17名であった。このことから、学生が本校専攻科を修了する前に、英文アブストラクト作成指導を授業で取り扱う必要性は確認できた。

##### (4) はい 9名、 いいえ 11名

英文による専門分野の説明に関しては、単発的にこれまでの授業でも演習を行ってきたことがあるという回答が9名であった。英文で専門分野の内容について説明した経験は英語によるプレゼンテーションに有効であると思われたが、今回の20名に関しては特に大きな差は認識できなかった。これは、英語により専門分野について説明する活動の質に関して、その効果が明らかになるほどのまとまった量の指導がこれまでになされていなかったためであると推測される。

## (5) はい 18名、いいえ 2名

フォスター氏が提案した、ひとつの雛形としての英文アブストラクトを構成する6つの項目に関して、18名はその理解について問題がないと回答している。これまで系統だった英文アブストラクト作成の指導を受けたことがない学生も、その構成自体には特に問題なく対応できたことがうかがえる。このことから6つの項目が簡潔にまとめてあり、学生もそれぞれの項目に自分の特別研究の内容を組み合わせ英語によるアブストラクト作成に自信をもって取り組めたことがわかる。これらのことから、学生がそれぞれの必要に応じて変化させる土台となるフォーマットの雛形としてフォスター氏が提案した内容は有効であると推測される。

(6) 今回英文アブストラクト作成に取り組むうえで、学生が困難を感じた点は専門分野に関する語彙、読み手を意識した英文の作成であった。このことから、各専門学科における指導教員と連絡を取り合い、協力しつつ指導する必要性を感じた。それに加え、学習者の自主的な取り組みを促進するためにも、授業テキスト以外の参考文献を示すことも有効と思われる。また、プレゼンテーションの際、その論文でカギとなる物質、装置等の英文名称の発音がカタカナ発音になっていることも少なくなかった。これらも学習者自身が事前に専門教員・インターネット等で確認する指導が必要であった。

## (7) はい 20名、いいえ 0名

(2) で示したように、将来的に英文アブストラクト作成の必要性を予測している学生は17名であったが、必要性を意識していない3名の学生も含め、すべての学生が英文アブストラクト作成演習に興味を持って取り組めたと回答した。課題解決への動機づけとして、将来的な必要性の自覚以外にも、自分自身の研究内容を人に伝えるという活動自体に興味を持ったことで、本取り組みへの前向きな姿勢を生み出したと考えられ、今回のアンケート結果は、動機づけとして考えられる要因の多様性も示している。

## (8) はい 17名、いいえ 3名

今回学習した内容が役に立つか否かに関しては、

17名が役に立つと回答した。英文アブストラクトを作成する際の雛形の提供が、同様の取り組みに取り組んだ経験が少ない学生にひとつの指針を与えられた結果を推測される。学習者は、各自が自立すべき手段を得ることで、英文アブストラクト作成に自信が持てたと思われる。興味深いのは(8)において「はい」を選択した学生が、必ずしも(7)において「はい」を選択していないことであった。

次は(11)の設問に関連する内容となるが、ここで指摘された「役に立たない」、という回答については、実際にプレゼンテーションを経験する機会が1回しかなく、それでプレゼンテーションの改善につながるか自信がない、という指摘があった。プレゼンの準備⇒プレゼンの実施⇒プレゼン後の振り返り、と3つの過程を通して一連の流れを経験することになったが、繰り返しその活動に取り組むきっかけ作り等、その定着を図る手段を今後検討する必要がある。

## (9) はい 18名、いいえ 2名

他の学生のプレゼンを評価する取り組みに関しては、学習者としての立場のまま他の学生の評価をする、という慣れない取り組みのため、その不慣れさから否定的な意見が多いかと予想された。しかし、筆者の予想に反して、18名が適切に評価に取り組めたと回答している。これは、その評価法を簡潔にした(資料2参照)のに加え、前もって評価項目を具体的に提示し、各学生のプレゼンテーションにおける評価を繰り返した結果と思われる。

個々の学生のパフォーマンスに関しては、発表の際の原稿への依存度、アイコンタクトの頻度、そしてパワーポイントの見やすさの項目において、評価の高かったプレゼンテーションとそうでないプレゼンテーションの間に「差」が生じた。これらの項目は、少しの意識付けでプレゼンテーションの全体的なイメージ向上に直接的につながることを期待されることから、学習者がこれらの点に注意を払うことはパフォーマンス改善への大切な気づきのきっかけになると思われる。

## (10) はい 15名、いいえ 5名

他学生の評価をすることがは自分のプレゼンへのヒントになったか、に関しては、15名の学生が肯定

的な回答をしている。その具体的な内容は、アイコンタクトの取り方、見やすい資料の提示、話すスピード等が挙げられている。それぞれのプレゼンターの優れたパフォーマンスはもちろんであるが、必ずしもそれだけが参考になるのではなく、うまくいかなかった例も参考になると考えられる。各学生は自分が”critical”は視点を持ち、他の学生のプレゼンテーションを観察することで、自らの取り組みもその視点から評価し、改善に繋げていく能力の育成が期待される。また、今後この”critical”な視点をさらに育成するために、各学生のプレゼンテーションをビデオ撮影し、それをクラス全体で振り返りながら、改善を一緒に考えていく活動を組み入れることも意義があると思われる。

(11) 最後に、今後の取り組みへ要望として、英文アブストラクト作成・プレゼンテーション活動に関して、学習者が実際にその活動に取り組む機会を増やす、各専門分野で必要とされる英語のボキャブラリー・決まり文句等をより多く学生に提供する、プレゼンテーションの後、英文作成について文法的な誤りを指摘・修正する時間をとる、等があった。いずれの場合も、限られた授業時間の中ですべての要望に応えることは難しく、他の授業と連携して(時間配分を調整して)これらを補完していく必要性を感じた。

(6)とも関連するが、例文を多く示してほしい、という点については、英文論文作成・プレゼンテーションに関する出版物がすでに市場に出ており、たとえば藤野 2014、Langham 2013、志村 2010、等を参考資料として紹介することで解決できると思われる。

100分授業の半分を使い、6回の授業に分けて(1回の授業につき3から4人の割り振り)プレゼンテーションを実施した。最初の学生のプレゼンから最後の学生のプレゼンまでに5週間のタイムラグが生じたことになり、早い時期にプレゼンをした学生には不利になる状況が考えられた。当初、評価の公正性を保つため、学生にはプレゼンの順番が後になるに従い、期待されるレベルがあがる(評価が厳しくなる)ことを説明した。ただし、実際にプレゼンを観察し終えての全般的な印象では、特に後の順番のプレゼンテーションになるほどそのパフォーマンスがよくなっていったということもなく、個人によって準備レベルは異

なっていた。これらのことから、同一人物のプレゼンテーションを複数回観察し、その変化を記録していくことが実際のコンピテンシー向上を見極めるために必要になることがわかった。

まとめると、取り組みを始める際に期待した、将来の必要性の自覚が「学習への動機づけに繋がる」ことに関しては、その期待の実現を推測させる結果となったが。その一方で「学習効果を高める」ことに関しては、今後も同様の取り組みを続け、個々の学習者のパフォーマンスの変遷を観察し、判断する必要がある。

## 6. 最後に

E.S.P.におけるひとつの取り組みとして、高専教員研修会で出会った英文アブストラクト構成に関する情報を、専攻科2年生の英語授業に取り入れることを計画した。これまで系統立った英文アブストラクト作成の指導を受けたことがない学生が多いクラスで、各自が取り組んでいる特別研究について英文アブストラクトを作成し、それをスプリングボードとして英語を用いたプレゼンテーションに取り組む活動を実施した。英文アブストラクトに関しては、6つの項目からなる雛形を学習者に示し、それを土台として作成するように指導したが、多くの学習者はそのフォーマットを使うことについて不安を示すことなく、英文アブストラクト作成に取り組むことができた。そのアブストラクトを用いたプレゼンテーションについては、時間の制限があり、各学習者が1回のみ行うことしかできななかったが、授業を観察した結果では、積極的にこれらの活動に参加していたと判断できる。これは、将来実際にそのような場面に出会うというその必要性が学習者の課題取り組みへの動機づけを高めた結果を示していると思われる。ただし、今後の改善点として、授業の中に継続してプレゼンテーション活動を取り入れ、個々の学習者の段階的な成長を観察する必要性も判明した。さらに、今回、学習者自身が自分の取り組み状態や他の学習者のパフォーマンスを評価する活動を組み入れた。これらは、それぞれの学習者に“critical”な視点を持ち、他の学習者だけでなく自分自身のパフォーマンスを「振り返る」重要性の意識付けに繋がり、最終的には、この意識付けにより、自己学習プロセスを適切に管理することができるよう”independent learner”に近づくことも期待される。

この「振り返り」の取り組みについても今後の研究課題としたい。

### 謝辞

研修会講師 J.フォスター氏には、感謝の意を表します。講師の適切な準備と指導により、多くのことを学んだ講習会でした。本稿に記載した研修内容に誤りがあれば、全て筆者に責任があります。

### 参考文献

- 志村史夫(2010)『理工系のための英語プレゼンテーションの技術』 ジャパンタイムズ  
 廣岡慶彦(2014)『理工系のための入門英語プレゼンテーション』 朝倉書店  
 藤野輝雄(2014)『理科系のための英語論文表現文例集』 研究社  
 C.S.Langham (2013) 『国際学会 English 挨拶・口演・発表・質問・座長進行』 医歯薬出版  
 J.Foster (2012) 「英語教員を対象とした科学技術英語研修会資料」 熊本高等専門学校熊本キャンパス  
 Miller, C.R. (1984) Genre as social action. *Quarterly Journal of Speech* 70, 151-167

【追記】 次の資料に関しては、用紙サイズ・行間・スペース等、実際配布したものと異なっています。

### (資料1)

「プレゼン事前チェック & プレゼン後振り返りシート」

NO( )NAME( )

\*それぞれの項目に関して、確認チェック (✓) を入れてください。

⇒プレゼンに取り組む段階で：

- ① 原稿の英文は、複雑な構文を使ったり、一文が長くなり過ぎでいいですか。( )
- ② 原稿の英文は十分暗記できましたか。( )
- ③ プレゼンの通し練習をしましたか。( )

- ④ 発音が不確かな単語は発音を確認しましたか。( )
- ⑤ クラスメイトにプレゼンを聞いてもらい、アドバイスをもらいましたか。( )

⇒プレゼンを終えた段階で：

- ① 思うようなプレゼンができましたか。
- ② よかった点はどのようなことですか。
- ③ 改善点を挙げるとすれば、どのようなことがありますか。

⇒担当教員からコメント：

### (資料2)

「プレゼンテーション評価シート」

評価者 ( )

プレゼン実施学生氏名 ( ) 君・さん

プレゼン実施日：2015年 ( ) 月 ( ) 日

- \*持ち時間の割り振りは適切であった。(そう思う・どちらとも言えない・そう思わない)
- \*プレゼンの構成は適切であった。(そう思う・どちらとも言えない・そう思わない)
- \*原稿に頼ることなく発表ができた。(そう思う・どちらとも言えない・そう思わない)
- \*アイコンタクトは適切であった。(そう思う・どちらとも言えない・そう思わない)
- \*パワーポイントは適切であった。(そう思う・どちらとも言えない・そう思わない)
- \*グラフの説明は適切であった。(そう思う・どちらとも言えない・そう思わない)
- \*質問への解答は適切であった。(そう思う・どちらとも言えない・そう思わない)